

浦賀文化

平成 21 (2009) 年 1 月 1 日

第 17 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

編集・発行:横須賀市浦賀コミュニティセンター分館(浦賀文化センター) 〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1 TEL&FAX 046-842-4121

うらがの寫眞館



三浦郡浦賀町時代の蛇島付近

正十二年九月一日、関東地方を襲った大震災直後の崩壊現場の痛ましい光景である。左側に写っている愛宕山が大きく崩れ、山肌が見えている。当館の展示室にある西浦賀の町並み模型を見てもわかるように多くの商家・民家があり、そのうち数十軒が潰されて埋没し、数多くの尊い人命が失われた場所である。

そしてこの崩れた土砂で、紺屋町バス停から海岸通りの道路ができたのである。

一関東大震災の爪跡

「中島永胤君招魂の碑を建てよう」と思いついたのは明治二十三年九月、翌年七月に建てた。事績を後世に伝えるために、浦賀港を見下ろせる絶景の場所に建てよう」と、草を刈り、枝を払い、土をならし、石を据え、花の木や常葉木を植え、町民は勿論、愛宕山に来る人々に、安房・上総の海山を望む四方の眺望が素晴らしい山頂への道を整備し、休憩所を造り、ここに来る人たちが三郎助の慰霊や遊びに利用することを願ってやまない。」

三郎助と深いかわりのあった人(碑に刻まれた三十六人)が賛同するならば、町の人も賛同しました。記

西浦賀の蛇島町にある船番所跡(現在の浦賀病院)より、紺屋町・宮下町方面を写している。大

「中島君招魂碑」の

「発起者」の碑

明治二十四(一八九二)年に開園した、横須賀で最も古い愛宕山公園に石碑が四つ建っています。「中島君招魂碑」(明治二十四年五月)、「咸臨丸出港の碑」(昭和二十五年七月)、「与謝野鉄幹・晶子歌碑」(昭和五十九年十一月)そして「中島君招魂碑の発起者の碑」です。浦賀の町の人々の気持ちが綴られた石碑です。

「浦賀園」のアーチをくぐり山頂へ向うと、中程に港が見える広場があります。広場に入る正面に「発起者」の碑があります。港を見守り「中島君招魂碑」の露払いのように建てられているこの碑は、浦賀の町の人々が敬慕する中島三郎助永胤の慰霊に、公園の建設と整備を行なった様子が記されています。

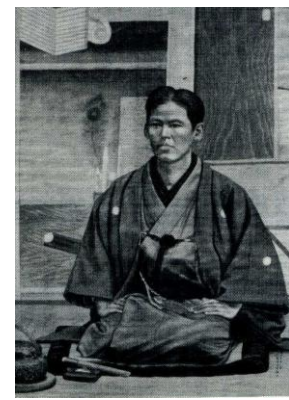
録によると、浦賀町発起人二十八名(内十八名は碑に名が刻まれています)、同町賛成員七十三人が名を連ね、さらに愛宕山公園整備寄付人名簿に九十六の人名と法人の名が記されています。多くの町の人達が建設にかかわっていることがわかります。近隣の町の人も含め町民こそ協力して公園を造り、招魂碑を建てたのです。現在も町の人々が公園の清掃など維持管理を行っています。



愛宕山中腹の「中島君招魂碑」の「発起者」の碑

兵衛をはじめ、初代から六代までの町長と町の人々の名が五十七人、二千二百五十六株を所有していたことがわかります(株主総数六百六十六名、発行株式二万株)。このことから、三郎助が浦賀の町の人々からいかに敬われ、慕われていたかが分かります。

参考資料
横須賀市文化財総合調査報告書
中島三郎助文書附冊
浦賀船渠集 株六十年史

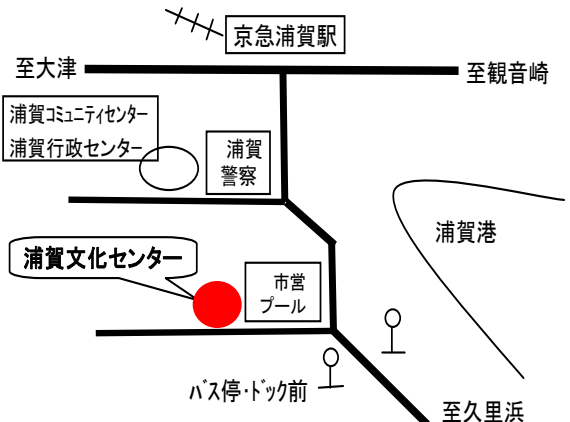


碑文

浦賀船渠(株)設立と「中島君招魂碑」建設に尽力した日井(大黒屋)儀兵衛の肖像画(明治二十年十一月作成、中島三郎助文書附冊より)

浦賀コミュニティセンター分館(浦賀文化センター)

浦賀駅から徒歩10分



所在地:横須賀市浦賀7-2-1
電話: 046-842-4121
FAX: 046-842-4121

東西風

あけましておめでとうございませう。今年の干支は丑です。しかしこれでは十二支だけで、十干が抜けています。最近では十干といつてもわからなくなってきました。十干は「甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」で通信簿の評価にありましたので記憶にある方がいると思います。これと「子・丑・寅・卯」の十二支を組み合わせたものです。高校野球で有名な甲子園球場は大正十三年の「甲子」(きのえね)の年に完成したので、その年の干支を名付けたものです。これです。

中島永胤君招魂の碑建んことおもひ立ちしハ明治二十三年九月にして成功をとげしハ同二十四年七月なりかくいしぶみのなれるにつけても永く此みたまのなぐさめ草にとて此岡のけしきすぐれたる處をうはらかやはらかりそけてつちをならし石をすゑ花の木常盤木あまたうゑまたここにまつてくる人々のため北より東より南より西よりたよりよきかたをとめていくすじもみちをつくりてみなとのけしきをはじめ安房上総の海山をとほくちかくみわたさるるあたりここに東屋などまうけ此きとにかかる勝景あることをなべての人にもしらしめしかつさとびとのあそび處にてもとてかくは志なしつるなりけりなほ今よりのちこの岡つづき景あるかぎりはひらきそへなむことをねがふにこそ此人々にかはりてかくいふは西野の前知筆とるは賜硯堂の主成瀬温なり

明治二十四年七月

- | 発起者 | |
|--------|--------|
| 日井儀兵衛 | 宮井與右衛門 |
| 太田又四郎 | 岩田平作 |
| 三六次兵衛 | 白井藤一朗 |
| 濱口英幹 | 長島長七 |
| 宮井清左衛門 | 菅井與兵衛 |
| 増田太兵衛 | 白井辰右衛門 |
| 加藤小兵衛 | 穴澤與十郎 |
| 川村喜太郎 | 浅水 璣 |
| 山崎元孝 | 高橋宏右衛門 |
| 田邊定兵衛 | 山下喜助 |
| 山本平兵衛 | 直井 晋 |
| 若村 忠直 | 光田 源次郎 |
| 若村 忠直 | 光田 源次郎 |

(山本)

発行：横須賀市浦賀コミュニティセンター分館(浦賀文化センター) 休館日：年末年始 電話番号：046-842-4121

賀の物 浦の植

アマモ(アマモ科)

別名 アジモ、モシオグサ

観音埼から燈明堂辺りの海岸の砂浜に打ち揚げられた、長い紐のような植物を見たかたもおられると思いますが、アマモ属のタチアマモだと思えます。最近マスメディア等も海辺の環境を良くする手立てのひとつにアマモが見直され、保護・育成の活動を伝えています。

アマモは水深一〜三mの砂泥地に地下茎と根をひろげる性質があり、しばしば群生します。藻場(アマモ場)は海水の浄化をし、多様な小魚介類の揺りかご(水産資源の維持)となっています。将来的には、アマモの品種改良により「果実」を穀物として利用することも夢ではないといわれます。ワカメやコンブは海藻(かいそう)で胞子(胞子植物)でふえますが、アマモは海草(うみくさ)で一生海中で過ごし、花を咲かせ実をならします。おなじ音なのですが意味が異なるといいます。初夏ころにでき

なります。間違わないようにアマモを淡水中の水草(みずくさ)との対比から海藻をあえて「うみくさ」とよんで区別しています。葉は細長く幅三〜五mm、長さ五十〜百cm、葉先は円頭で五〜七脈。雌雄同株で五月ごろに小さい緑色の線形へら状のさやに包まれた小さい花をつけます。オバナとメバナとがあります。メバナのメシベが先熟することにより海の中のアマモも近親交配の害を避けています。花卉はありませんがオバナの中から三mm位の糸状(ひも)の花粉が出てきます。肉眼でも、ものさしで測るともできるくらい植物上、最長の花粉といわれています。この花粉は、海水の比重と同じ比重で海水と同じ圧力をもつて海水中を漂い、メバナのメシベにたどり着き花粉管を出して受精します。このような受精のしかたを水媒花といっています。初夏ころにでき

大前 悦宏 神奈川県植物誌 調査会会員

る種子は米俵のような形をし、長さ約四mmになり食べられず。普通花粉には乾燥や太陽光線から守るため硬い外皮・膜があります。水の中なので簡単な薄い膜で周囲をつつまれています。植物の中で最も長い名前(別名)といわれます。童宮の乙姫の元結の切りはずし・リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシ二十一文字。茎がちぎれて



小魚介類の揺りかごであり、海辺の環境も守るアマモ

漂うことがあり平たいひもは、ちょうど童宮城の乙姫様の髪の毛の切れたものに似ている、と想像したのでしようか? ちなみにイ草の「い」が一番短い名。アマモの名の由来は根茎に甘みがあるからといわれています。分布は北海道・本州・四国・九州・欧州・アジア・欧米の各海岸。県内には三浦半島を中心に湘南海岸を含めてアマモ、タチアマモ、コアマモ、エビアマモが見られます。

編集員から

あけましておめでとうございませう。清々しい新年を迎えられたことと思います。昨年四月に浦賀コミュニティセンター分館(浦賀文化センター)として新たなスタートを切りましたが、皆様のご要望にお応え出来ませんでした。どうか、「気軽に」ご利用いただける施設、浦賀文化センターとして皆様のご来館をお待ちします。本年もどうぞよろしくお願いいたします。職員一同

ほしか 干鰯問屋と国内商業港



歴史 語り座・浦賀

17

郷土史家 山本 詔一

徳川家康が死去すると浦賀の貿易港の役割も終焉をむかえた。これはキリスト教への弾圧だけではなく、家康が開いた江戸という町が生産性に乏しく、あらゆる物資を船によって移入しなければ成立しないという問題を孕んでいたことも大きな理由となっている。

江戸へ入る船は浦賀沖を通過しなければならず、その浦賀が外国人の基地になつていたのでは、一旦ことが起つた場合、江戸の町がどのような事態になるか、想像に難くない。この問題は、家康が生前から危惧されていたが、誰も言い出せない状況下にあった。

江戸へ物資を運んでくる船にもひとつ不満があった。それは江戸へ物資の運び込みが済むと帰りに積む荷物がなく、しかたなく船のバランスをとるために石を積んでいたのが干鰯(干鰯)の干鰯(干鰯)であった。干鰯(干鰯)は三浦半島や房総半島で生産され始めた肥料で、その字のごとく鰯を天日干しにしたものが「干鰯」、脂がのついていて一度釜で茹で身を搾ったものを干し、俵に詰めて商品としたものが「粕」、この時搾られて出てきた油を「魚油」といいこの三点はほぼセットのように扱われた。これらの肥料は、大阪を中心に生産量が増してきた綿花栽培には欠か

せないものであった。干鰯の最大生産地である房総半島の九十九里浜では、独自に流通経路を求めていたが、漁村にも船にもリスクが大きくかかることから、江戸の入り口にあり、船のメンテナンスもできる浦賀が中継基地として注目され、浦賀に干鰯問屋が開設されるようになった。寛永期になると、漁法が発展し水揚げ量が増してくると、浦賀の問屋も本格的に活動するようになり、寛永十九年(一六四二)には問屋職(とんやしき)となり、株を持たなければ営業ができないうちになった。これからの五十年間が浦賀干鰯問屋の最盛期であった。干鰯問屋がこれだけ隆盛になれば、他の職種も活発に動くようになり、「浦賀事跡考」によれば、材木問屋、茶問屋、煙草問屋などもできていたと記されており、何万両という財産を持つ問屋が何軒もあったといわれ、国内の商業港としての地位を築いた時代であった。

歴史講座開催のお知らせ

平成20年度歴史講座を、1月21、28、2月4、11、18日(各水曜日)13:30~15:30、全5回開催します。横須賀開国史研究会々長の山本詔一さんをお迎えし、「中島三郎助を語る」と題して、生誕190年、没後140年の三郎助の人となりをお話ししていきます。11月25日付広報横須賀お知らせ版等でご案内の通り、締切は1月9日(金)です。往復はがき(1葉1名)、または、返信用はがきご持参のうえ窓口で申し込みください。応募者多数の場合は抽選とさせていただきます(定員60人)。申込、お問い合わせは、浦賀文化センター

〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1 ☎&Fax 046-842-4121

笑話一題

いたとき(嘉永六(一八五三年六月)、漁師の標、灯台の灯りを見たに違いない。それぞれの情景を浮かべてみてはいかががでしょうか。歴史や文化、東と西を往來する渡し船のエピソードなどが浦賀文化センターにあります。ロマンが一杯、書籍棚に溢れています。(書籍・資料などは閲覧ができます。)



干鰯蔵として使用されていた蔵

(東浦賀二丁目(新町)あたり、昭和四十七年頃)